

---

# World Creator Online

野菜 イサヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

World Creator Online

### 【Nコード】

N7954Z

### 【作者名】

野菜 イサヤ

### 【あらすじ】

日本で4人に1人がプレイしていると言われている巨大オンラインゲーム『ワールドクリエイターオンライン』。そんなある日、その巨大オンラインゲームの特別イベントに選ばれた選ばれたプレイヤー達がワールドクリエイターオンラインの世界に飛ばされた。

帰る方法は？ なぜ自分達は呼ばれたのか？ これはデスゲームなのか？

そんな何一つ理解不能なまま、ゲームプレイヤー達は元の世界へ帰るため武器を取るのだった。

## 1 始まりの広場（前書き）

文章能力に自信がありませんが、それでも頑張って連載を続けていこうと思います。

誤字・脱字は言っただけだと嬉しいです。

## 1 始まりの広場

意識を失っていたわけでも、ボーっとしていたわけでもない。

しかし少年が気付いた時には、彼の視界には見たこともないような美しい街並みが広がっていた。

茶色いレンガタイルの地面に、街のイメージを壊すことなくそびえ立つ綺麗な家々。

そしてそんな美しい街に集められた人々。

物音ひとつしない街には今、人々の悲鳴、動揺、怒りが飛び交っていた。

怒りを鎮める宛てがない者は、怒りに任せて他人を傷つけ、状況を理解できない者はただその場に座り込むことしかできない。

無論、少年もその中の一人にカウントしてもいいだろう。

しかし、少年は今置かれている状況を理解しようとせず、ただ無心に悲鳴をあげる人々を黙って眺めていた。

少年は自分の体をふと確認してみる。

そこには少年がさつきまで来ていた黒を基調とした寝巻ではなく、いつの間になら青黒い服に着替えさせられ、背中に長剣、腰に短剣を携えていた。

(……コスプレ?)

少年は首を傾げながらも腰に携えていた短剣を引き抜いてみる。

そして重すぎもせず、軽すぎもしない丁度良い重さをした短刀をひゅんひゅんと軽く振ってみる。

「おおいつ、危ねえな!」

短剣を振っていると横に立っていた人に怒られ、少年は「はは、

「すいません」と軽く謝り、短剣を再び自分の腰へと収めた。

短剣を腰へ収めたところで、少年はようやく自分が置かれた状況を理解してみようと周りの様子を観察してみる。

どうやらここにいる人達は少年同様、自分がなぜここにいるのかわかっていないらしい。

「ここはどこだよ！ 誰か知ってる奴いねーのか!？」

「な、何なんだよ。まさか……俺って誘拐されたのか？」

「ちよっと、これ私が着ていた服じゃないじゃない！ あの服お気に入りだったんだから返しなさいよ!！」

しかし、惨めで情けない怒りに満ちた人々の悲鳴は、無残にも空へ消えていくだけだった。

(……………)

少年はもうとっくの昔に気づいているのかもしれない。

綺麗に磨かれた茶色のレンガタイル。そして先ほどから悠然と佇む大きな円型噴水。

少年には確かではないが心当たりがあった。

恐らくここは

『ワールドクリエイター・オンラインの世界へようこそ』

突然の声。突然耳に届いた機械染みた声は、少年だけではないらしく、周りにいた人々も少年と同じように突然の声に反応し、辺りを見回した。

しかし、声の主らしきものは何一つ見当たらない。

少年の視界には辺りをきよろきよろ物色している人々しか捉えることができなかった。

そしてどこからともなく聞こえてきた謎の声は、それでも言葉を続けた。

『この度はイベントの参加誠にありがとうございます。イベント参加者は多数おりましたので、申し訳ないのですがイベント参加者は条件を達成された方のみという形で決定することにいたしました』  
「イベント……？ 条件……？」

少年はそのイベントというものに心当たりがあった。

ついさっきまで少年はとあるオンラインゲームをプレイしていたのだ。内容はただのMMOと変わらない普通なものだった。

そしてそのゲームから一通のメールが届いたのだ。

《この度ワールドクリエイター・オンラインでは新たな技術へ向け、新しいステージ、キャラクタースキル、そしてゲームシステムを作り上げることが決定致しました。そしてユーザーの皆様にはお手数ですがしばらくの間、こちらが用意した特別イベントへの参加をさせていただくこととなります。つきましては

》

最初このメールを見た時、少年はゲーム運営の意図をすぐに把握することができた。

つまり「新ステージなどを追加させるため、このゲームはしばらくの間メンテナンスとしてプレイすることができない。その代り運営が用意したイベントで暇を潰してほしい」ということだろうと少年は予想した。

その時少年はなんの迷いもなくイベントへの参加を決意した。

そしてそのゲーム                      ワールドクリエイターオンラインの特別イベントが今ここで、謎の地で開催される。

少年はここがどこかという不明確な予想が、たった今確信へと変わった。

円型噴水に綺麗な街並み。間違いない。見間違えるはずもない。

ここは、ついさっきまで自分がプレイしていたオンラインゲーム、ワールドクリエイターオンラインの中なのだと。

ワールドクリエイター・オンライン。

名前の通り自分の理想の世界を作ることができる巨大オンラインゲームで、日本人の4人に1人がプレイしていると言われ世界中で慕われている大規模なオンラインゲームだ。

しかし、自分の理想の世界を作ることができるというのは嘘ではないが、実際問題不可能だと世間には喧かれています。

このワールドクリエイターオンラインはモンスターと戦う普通の戦闘ゲームというわけではなく、プレイヤー個人で様々なことをすることができ。

例えば普通にモンスターと戦うプレイヤーもいれば、武器を捨て商店を開き、他のプレイヤー達のサポートをするプレイヤーもいる。ベテランプレイヤーとなるとモンスター退治をしながら商店を開いている猛者までいる。

つまり何が言いたいかというと、このゲーム内では自分の理想のゲームプレイングができるということだ。

特殊アイテムがあれば空を飛ぶこともできれば水の中で長時間滞在することも可能だ。

ではなぜ理想の世界を作ることが不可能なのか。

理由は至って単純だ。日常生活同様、ゲーム内で何が起こるか分からないからだ。

モンスターをひたすら狩り続けている者は、HPヒットポイントがゼロになるとそれなりのペナルティ、代償が科せられてしまう。

また、一見安全だと思われる商店プレイヤー達もそういうわけにはいかない。

商店をモンスターに襲われればそこで終わりと言ってもいい。

商店を営むプレイヤーはモンスターに襲われても死ぬという心配性があまりないが、その代わり自分自身の全財産を失うことになってしまう。それが原因でこのワールドクリエイターオンラインを手放したユーザーもけっこう少なくはない。

そして今、少年はそのワールドクリエイターオンラインの世界に立っている。

少年だけではない、イベントという言葉に誘惑されたプレイヤー達全員が今こうしてまるで夢のように、そして残酷なまでにその仮想世界の地に立っている。

「ふざけんな！ 何がイベントだ！ ここはどこだよ、これからバイトがあんだよ！」

「それ以前にここはどこ？ 家に帰れるの？」

謎の声

恐らくゲームのシステムアナウンスが発した言葉を合図に、人々の不安と怒りは一層強くなる。

しかし、システムアナウンスは臆することなく、はたまた聞こえていないのかそのまま言葉を続けた。

『今回の特別イベント目標は、『世界をリセットする』です。皆様のご武運をお祈りしています』

「はあ？ リセット？ 何言ってんだよ」

「そんな事はいいからさっさと家に帰せ！ どこなんだよこっちは」  
「……………」



人々が不満をどこにいるかもわからないシステムアナウンスへとぶつける中、少年はひとり黙り込んでいた。

世界をリセットする。

ゲームを完全クリアしろということなのか。それとも全モンスターを退治しろということなのか、少年は色々な仮説を立ててみるものの、さっぱりといった感じに、諦めて考えることを放棄することにした。

『尚、このイベントは目標を達成されるまではログアウトをすることができません。又、ここは仮想世界の中であり現実世界ではありません。しかし、仮想世界の肉体が《命を落とす》ということがあれば、ペナルティとして現実世界の《命》を支払うシステムとなっております』

「……は？」

少年は思わずどこにいるかもわからないシステムアナウンスに対し、俯いていた顔を空へと向けた。

『この特別イベントは新たな技術の試験運転も兼ねて行っております。皆様の体は今、肉体以外はこのワールドクリエイター・オンラインの世界へとダイブしていただいている状態となっております』  
「……ダイブ？ 肉体以外が、ダイブ？」

少年は無意識の内に自分の体をぱんぱんと叩いていた。しかし、普段通りの自分の肉体と何の違和感もない。

そんな中、少年の不安を無視するかのようにシステムアナウンスは言葉を続ける。

『このイベントは皆様平等にイベントを楽しんでもらうため、装備はそのままですがレベルを皆様平等にLv.5からスタートとさせ

ていただきます。また所持金は均等に3000ミルからのスタートです。では、5分後、イベントを開始します』

そういうと否やシステムアナウンスの声は消え失せ、少年やほかのプレイヤー達が集められている広場には恐ろしいほどの沈黙が訪れる。

これは夢なのか。

今のアナウンスはすべて事実なのか。

そもそもなぜ自分たちはゲームの世界にいるのか。ここは本当にゲームの世界なのか。誘拐されただけかもしれない。

ここは仮想世界で現実世界の自分は今、本当に仮想世界の自分が戻ってくるのを今か今かと待っているのか。

もしこの仮想世界とやらで命を落とすと、本当に現実世界の自分まで命を落としてしまうのか。

少年は自分の体が震えていることに気づき、必死に自分の体を両腕で包み込む。がたがたと小刻みに震え、そして泣きそうな顔になりながらも自分の意識を保とうとする。

周りの様子を窺うと自分と同じように体を震わせている者もいれば、未だに自分が置かれた状況を理解していない、または理解しようとしていない者達で静まり返っていた。

「ふ、ふふ、ふざけんな！」

突然広場に響き渡った怒号に、少年を含めた広場ほぼ全員が声の主を見やった。

そこには先程から罵声を放っていた男性が地団駄を踏んでいた。

「何おめえら黙り込んでんだよ！ こんなの運営のイタズラに決ま

ってんだろ！」

「……じ、じゃあ今のこの私たちの状況を説明してよ。なんで私たちは今ゲーム内のアバターの姿をしているの？ どうしてそのイタズラでこんな知らない場所にまで連れてこられないといけないの？」

一人の女性がそういうと、男性は女性を一睨みし黙り込んだ。

そして女性は口を再び開いた。

「このイベントって終わらせるためにはこのWCOワールドクリエイターオンラインをクリアしろってことだよな……」

その言葉を聞き、少年は声には出さなかったが心の中で「そうかもしれない」と呟いた。

少年はその他にも色々な考えを導き出していた。

しかし、ゲームをクリアするという考えしかまともな仮説が成り立たなかった。

そしてその《ゲームをクリアする》。これには一っただけ大きな問題があるのだ。

少年は目立つつもりはなかったが、少し遠慮がちで女性の発言に異議を唱えた。

「……そのゲームクリアって、どうやったらゲームクリアになるの？」

「そ、それは……」

このワールドクリエイターオンラインにはシナリオ等が存在しない。ただひたすら狩りをしたり物売ったり、はたまたプレイヤー同士でコミュニケーションをとったりと、《暇な時に少しやる》をコンセプトに作られたゲームだ。

そんなゲームをどうクリアしろというのだろうか。

『それではこれよりワールドクリエイター・オンライン特別イベントを開始致します』

始まってしまった。

謎が何一つ解明されていない状況でこのイベントに呼ばれ、巻き込まれた約一万と五千人ものプレイヤー達は、攻略の手掛かりが何一つないデスゲームに参加するはめになってしまった。

なぜこんなことになってしまったのか。

このイベントの参加条件とは何か、そしてなぜ少年は、プレイヤー達は選ばれたのか。

このイベントは本当にクリアすることができるのか。

少年は嫌なほど頭に浮かんでくる疑問符を振りほどき、まずは近く知り合いがいることを信じ、広場を散策することにした。

「ユー！？ ユーじゃねーか！ お前もこの変なイベントに巻き込まれたみてーだな」

広場に知り合いがいないか散策していた少年 ユー。

そんな少年、ユーを含む多くのプレイヤー達がよばれた召喚広場、通称《始まりの広場》の一角にはユーが思ってもみなかった意外なプレイヤーがそこにはいた。

「……まさかお前みたいなのがこんなイベントに参加させられてたなんて……。レギンにしては珍しいね」

ユーは平静を装いつつ、それでも隠しきれない喜びをレギンにぶつけるかのように自分の拳をレギンの胸に軽く当てた。

レギンはユーが今回の特別イベントに巻き込まれるまでひいき鼻肩にさせてもらっていた商店プレイヤーで、とにかく自分が儲かるならどんな危ない橋でも裸で渡ろうとする少し危なっかしいプレイヤーだ。それでもレギンの営む商店はなかなか品揃えも良く、その上値段も高くもなければ安くもないといった丁度良い値段で提供してくれる。

ユー以外にもレギンのお店を鼻肩にしているプレイヤーは決して少なくはないだろう。

「それにしても……こいつあどーゆうことなんだろうな」

レギンはそういうと自分の体を確認するようにはんぱんと自分の腰あたりを叩く。

同時にユーも自分の服装を改めて確認した。

レギンの服装は現実世界にも居そうな黒いズボンに白いワイシャツ、そして太ももまで伸びたエプロンを身に着けている。

それに引き替えユーの服装は青黒いジャージのような戦闘服に背中には自分の身長より少し長い長剣、そして左腰にはサバイバルナイフと言っただけではないが、それでも十分過ぎるほどの立派な短剣が腰に下げられている。

レギンの服装はともかく、ユーの服装はどう説明しても現実世界で来ていたと言いつてもいい訳することができない。

ここでユーは改めてここは仮想空間なんだろうかと再認識した。

「俺の記憶が正しければ今のユーの服装、それってゲームのユーのAvatarだよな？」

「……うん」

レギンはそう言つと「やっぱりか」と言い、腕を組む。それに釣られる様にユーも同様に自分の腕を組んだ。

「ねえレギン。レギンは今からどうするつもり？」

「んー、問題はそこなんだよなあ。システム何たらはゲームをクリアしろつて言つてたけど、ありや絶対クリアさせる気ねーと思うぞ」

「……それは確かに俺も思った」

「それによお」

言葉を切つたレギンが自分の右腕に目をやった。

レギンが見つめる右腕、そこにはゲームでよく見る青緑色のゲージ、そしてそのゲージの下には同じように薄紫、水色のゲージ、と三段重ねにレギンの右腕付近を浮遊するように表示されていた。

「これってまさかHPとかじゃねーよなあ……？」

「いや、そのまさかのHP（ヒットポイント）だと思うよ……。んで、その下がMP（マナポイント）で

さらにその下がSPスキルポイント」

ユーは自分にも表示されているゲージをレギンに見せ、3つのゲージに指を指しながら言った。

そしてこのきらきらと淡く輝きながら宙に表示されているゲージは、あの時システムアウンスが言った事が本当のことならば、このゲージは恐らく自分達の《命》に値するのではないかとユーはレギンに説明した。

しかし、レギンは薄々自分でも予想していたらしく、「だろうな」と軽く返事を返しただけだった。

「俺はまあ商業ばかりしてるからSPやらMPとは無縁だからいいけど、お前はどうかんだ？」

「一応俺は魔法とか習得してないからHPとSPに気を使っていればいいけど、それ以前にこのSPとか使えるのか？」

「そんなの俺がわかるわけねーだろ。それ以前にモンスターとかとどうやって戦うんだよ」

両者沈黙。

今まではコントローラーやらマウスで操作し、モンスターを倒してきたユーにとって、今現在置かれた状況が正直一番辛かった。

モンスターと戦うのは恐らく自分自身で剣を振るわなくてはならない。逃げる時も、罾を仕掛けたりする時も全て自分の手で、コントローラーなんかではなく、自分自身の手でしなければならぬだろう。

そう思っただけでも手ががたがたと震え、背中から悍ましい程の寒気が襲ってくる。

恐らくそれはユーだけではなく、このイベントに参加しているプレイヤー全員がそうあるだろう。

その証拠にまだイベントが開始され始まりの広場から出たものは

一人もいない。

広場を出た瞬間、本当のデスゲームが始まってしまう。

まだシステムアナウンスが言ったことが本当の事だとは思えない。この仮想世界で死ぬことにより現実世界へ帰ることができる、という可能性も十分にありえる。

それでもいざ広場の出口を前にすると、なぜか急に足が動かなくなってしまう。

どうしても心の中で響き続ける死という名のペナルティを心の中から振り払うことができない。

……もしも、もしも本当に死んでしまったら……

ユーヤレギンを含め、仮想世界へと召喚された約1万と5千人のプレイヤー達は、クリア成功率5%未満のデスゲームが始まって2週間が経ったにも関わらず、広場を出たものは一人としていなかった。

「うおおおお！ マイハニイイイ！！」

ゲーム開始から約2週間。広場にはだんだんと始まりの広場を出ようと集団で身支度をするパーティーや、偶然居合わせたギルドのメンバーどうしで狩りをしようと意気込む者達で、初日の頃の広場に充滿していたドス黒いオーラは徐々に姿を消しつつあった。

そんな中ユーとレギンは、2週間も歩き続けてレギンの《ハニ》を見つけて成功していた。

「ありがとなあ、ユー！ 1週間以上も突き合わせちゃまって。この恩はぜってー返す！」

「ま、まあ恩はそのうち返して貰おうかな」



レギンはそういうとハニーもといレギンが経営する商店《レギン・Sシヨップ》と、普通すぎる名前の商店内へと駆け込んでいった。ユーは「やれやれ」とため息を吐きつつ、手に持っていた水の入ったボトルを口につけた。

ゲームが開始され約2週間がたった今、ユーには様々な《発見》があった。

その中でも大きな発見はこの仮想世界でも腹が空くということだった。

まだここが仮想世界と断定されたわけではない《あくまでユーの予想だが》が、それでも腹が空くことに対してユーは心底驚いた。

まだ驚かされたことがある。それは空腹が訪れるだけでなく、喉も渴けば眠気も訪れるということだ。

そのためユーとレギンは餓死するのだけはごめんだと、広場にある宿屋や酒場でワールドクリエイターオンラインで使われている貨幣レギンを使い、ここまで生きながらえてきたのだった。

そうこうしているとやにやと嬉しそうにしているレギンが、自分の商店の中から姿を現した。

「店の中はどうだった？」

「ああ、俺が操作している時と何一つ変わってなかったよ。もうさつきからニヤニヤが止まんねーよ。へっへっへ」

「……………」

レギンによると店には食糧とかは置いてなかったらしく、中古の武器や武器を作るための素材、防具の耐久度を上げるための強化石しかなかったらしい。

「ユー、お前あと所持金どのくらいだ？」

「……………えっと400ミル」

「俺は340ミルだ……」

さすがに広場でだらだら過ごし過ぎたらしく、ユーとレギンの所持金は底を尽きかけていた。

ユーは頭の中で電卓をはじいた。

しかし、食事代、宿泊代を考えてもユーとレギンの合計金額の740ミルではあと一日過ごすのが限界だと空しい結果が導き出される。

「ねえレギン。さすがにそろそろ俺達も広場を出て戦う決心を持たないのかも……」

「だな。俺も薄々そう思っていたところだ」

しかしそうは言うもののレギンは商業専門プレイヤー。商業スキルという商売相手に対し取り引き上手になるスキルや商品の質を上げるようなとても戦闘には役に立ちそうにないスキルしか覚えてないらしい。

そうなると必然的にモンスターを狩るのはユーの役目になってしまふ。

「安心しろ。ヤバそうだったら俺がお前を担いで広場まで逃げてやるよ」

「いや、そんなことするなら一緒に戦おうよ」

はっはっはと大声で笑うレギンに少し苛立ちを感じつつも、ユーは広場の様子を確認する。

広場には今から出発するような雰囲気を出すパーティーもいれば、出発は明日にしようと言っているギルドもある。

ふと空を見上げると、そこには現実世界も顔負けの綺麗な黄昏色の空が広がっていた。

意を決して広場を出るのは明日からにしよう。  
そう思ったユーはレギンに夕食の話も兼ねて口を開いた。

「まあさすがに夜にモンスター狩りって怖くて無理だよなあ、それじゃあ明日はそこら辺のPTパーティーに入れてもらうか」

「……う、うん」

「なんだよ。嫌なのか？」

「えっ……いやあ、そーいうわけじゃ……」

ユーは苦虫を噛み潰したような顔でレギンから目を逸らした。  
パーティーでの行動が嫌というわけではないが、ユーには少しトラウマのようなものがあつた。

ユーはモンスターを倒すときは基本、背中に下げている自分の背丈ほどの長剣を使うのだが、どうもこの長剣がパーティーで狩りをする時に邪魔ならしく、過去に長剣をモンスター相手に振り回していた時、パーティーメンバーを巻き込んでしまい危うくPKプレイヤーキル行為を行うところだった経験がある。

それ以来パーティーを組む時は腰に下げている短剣を使うのだが、こっちはこっちで火力不足になり、逆に迷惑をかけパーティーメンバーメンバー諸共モンスターに殲滅せんめつされかけた経験があつた。

「ば、PTはいいよ、俺が頑張るから2人で行こう。2人で」

「いや、でもお前、死んだら終わりなんだぞ？ それならPT組んで大人数で行った方が」

「……2人で行きましょう、お願いします」

ユーはプライドをゴミ箱に捨てる勢いでレギンに頭を下げた。

「……？ そ、そこまで言うなら」

なんとかレギンを説得したユーは、夕食をとろうとレギンと近くの酒場に向かうことにした。

その刹那。

ジリリリリリ！！！！と、ワールドクリエイターオンライン全体に響く程の大音量の警告音が広場全域にいるプレイヤー達を包み込んだ。

そしてすぐ目の前まで来ていた酒場の入り口が《WARNING！！》と表示され、酒場の入り口が謎のシールドに包まれてしまう。それを合図に広場の到<sup>いた</sup>るところへ《WARNING！！》という文字が広場を黒と黄色に染めてゆく。

「お、おい！ こりやなんだよ！？」

レギンは焦りを隠すことができず、辺りをきよきよと見渡す。ユーは「酒場入れねえ」と心で愚痴りながらも、何の前触れもなかった警告音に動揺した。

すると忘れてくても忘れられない、聞き覚えのあるアナウンスがプレイヤー達の耳へと流れた。

『2週間広場を誰一人出なかったため、広場全域へペナルティが発せられました』

狩りの準備をしていたパーティーからも、談笑していたギルドからも笑い声が消え失せ、驚きを隠せない様子でただ広場に表示された《WARNING！！》の文字に目をやっている。

『明日の午前10時より、始まりの広場を目標に1万体のモンスターが襲撃します。また、ペナルティ中は回復アイテム及び明日のペ

ナルティ開始時刻の10時まで広場を出ることができません。また、  
宿舎や酒場、商店を営むプレイヤー達は、ペナルティ開始時刻まで  
店に出入りすることができません』

「なっ!?!? 広場を……出れない?」

「お、おい……俺の店に入れないってどーゆうわけだよ!」

悪夢が始まる。

『ペナルティ終了条件はモンスター1万体を討伐、またはプレイヤー  
全員が広場から脱出する。このいずれかが達成された場合、ペナ  
ルティは無効となります』

システムアナウンスと《WARNING!!》の表示文字が役目  
を終えたと言わんばかりに消滅してゆく。

そんな広場の中、ユーは声を出すこともなく、ただ暗くなってゆ  
く夕空を見つめることしかできなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7954z/>

---

World Creator Online

2011年12月28日01時54分発行